

氏 名	すず ぎ けん じ 鈴 木 健 二
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	工 博 第 2214 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	工 学 研 究 科 環 境 地 球 工 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	入居高齢者の視線からみた痴呆性高齢者グループホームのケアと空間構成に関する研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 小 林 正 美 教 授 岡 崎 甚 幸 教 授 高 田 光 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、新たなケア形態として近年急速に普及しつつある痴呆性高齢者グループホームを対象として、「入居高齢者—介護職員—物理的環境」三者間の関係性についての分析・考察から、痴呆性高齢者の生活の質の向上に寄与しうるケア環境のあり方について論考したものである。

本論文は序論・結論を含めて、全6章より構成されている。

序論である第1章では、まず、研究を取り巻く社会的な背景について概観するとともに、痴呆性高齢者に関連する施策や法制度の流れについての整理を行い、本論文の社会的な意義について明らかにしている。次に、研究に関連する理論的な背景についての検討を行い、痴呆性高齢者に関連する既往研究の動向とその到達点・問題点についての把握を行った上で、研究の目的・方法についての説明を行い、本論文の位置づけを明確にしている。

第2章では、入居高齢者に対する時系列的な行動観察調査の結果から、痴呆性高齢者グループホームへの入居が、入居高齢者の生活展開に及ぼしている影響について考察している。まず、入居高齢者の滞在傾向の時系列的な変化から、居室周りの共用空間など、居室を中心とする段階性に配慮した空間構成が、新しい環境へのスムーズな適応をもたらす上で重要な役割を果たすことをしている。また、生活内容の時系列的な変化から、入居高齢者の入居後の生活が単なる問題行動の減少に留まるのではなく、喪失していた生活行為を時間の経過と共に取り戻していく「生活再編」の過程として位置づけられることを明らかにしている。

第3章では、介護職員に対する時系列的な行動観察調査の結果から、介護職員のケアが入居高齢者の生活に及ぼしている影響について考察している。まず、介護職員と入居高齢者との間になされた会話の内容についての時系列的な変化から、介護職員から入居高齢者への関わりが心理的安定の重視から潜在能力の誘起へと質的に変容しつつあることを見出している。また、介護職員のケアが生活展開の安易な促しに留まるのではなく、不完全な部分を補う間接的な支援が陰ながら行われている実態を示すことで、介護職員のケアが痴呆性高齢者の生活の再編に重要な役割を果たしていることを明らかにしている。

第2章・第3章では、1ホームを対象に入居後半年間という入居間もない段階に焦点を当て、時間の経過に伴う変容の過程に着目するという縦断的研究の手法を用いているのに対して、第4章・第5章では、入居後一定の時間が経過し、落ち着いた状況にある複数の痴呆性高齢者グループホームを対象に比較・分析を行うという横断的研究の手法を用いている。

第4章では、介護職員の空間利用に関する横断的な比較調査の結果から、一般の要介護高齢者とは質量ともに異なるケアが必要とされる、痴呆性高齢者に対するケアの特性について考察を行っている。まず、介護職員の滞在傾向とヒアリングの結果から、痴呆性高齢者に対する介護職員の意識が介護職員の滞在傾向に及ぼしている影響について明らかにしており、空間利用の傾向ケアの質との間には大きな相関性が存在している事実を見出している。そして、入居高齢者への素早い対応を可能とする滞在様態である「開放的空間滞在」が重要な意味を有していることを導き出しており、ケア環境の質的向上に向けた基礎的条件として、介護職員から入居高齢者への見守りを支援する空間の視覚的連続性が重要であることを指摘してい

る。

第5章では、対照的な空間構成を有する事例の比較調査の結果から、物理的環境の違いが入居高齢者の生活と介護職員のケアに及ぼす影響について考察している。入居高齢者の生活展開の比較から、入居高齢者の行動範囲が大きく異なっている事実を見出し、空間構成の違いや視覚的連続性の違い等が入居高齢者の生活展開に影響を及ぼしていることを導き出している。また、介護職員のケアの比較から、介護職員の動線の拡がりが大きく異なっていること、空間構成から生じる動線の回遊性・選択性が介護職員のケアに質的な効果を生み出すことをそれぞれ導き出し、ケア環境の質を向上させる平面計画や空間構成の環境的要因について明らかにしている。

第6章は結論であり、本論で得られた主要な知見について要約するとともに、痴呆性高齢者の生活の質の向上に寄与しうるケア環境のあり方について提言を行っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、新たなケア形態として近年急速に普及しつつある痴呆性高齢者グループホームを対象として、「入居高齢者—介護職員—物理的環境」三者間の関係性についての分析・考察から、痴呆性高齢者の生活の質の向上に寄与しうるケア環境のあり方について論考したものであり、得られた主な成果は以下の通りである。

1. 入居高齢者の生活展開の時系列的な変化から、入居後の生活が問題行動の抑制へと向かうのではなく、入居高齢者に潜在している能力を引き出し、喪失していた生活行為を徐々に取り戻していく「生活再編」の過程として位置づけられることを明らかにしている。
2. 介護職員のケアの時系列的な変化から、入居高齢者への関わりが時間の経過と共に心理的安定の重視から潜在能力の誘起へと質的に変容しつつあることを明らかにしており、介護職員のケアによって痴呆性高齢者の「生活再編」が促されている事実を見出している。
3. 介護職員のケアに関する横断的な比較調査から、その空間利用がケアの質との間に大きな相関性を有している事実を見出すと共に、ケア環境の質的向上に向けた基礎的条件として、介護職員から入居高齢者への見守りを支援する空間の視覚的連続性が重要であることを指摘している。
4. 対照的な空間構成を有する事例の比較から、空間構成や平面特性から生じる動線の回遊性・選択性が介護職員のケアや入居高齢者の生活展開に影響を与えている事実を示しており、ケア環境の質を向上させる平面計画や空間構成などの環境的要因を明らかにしている。

以上、本論文は、痴呆性高齢者グループホームにおける生活とケアの質の向上をもたらす建築計画上の知見を人間行動学的に実証しており、今後の痴呆性高齢者グループホームの建築計画及び整備指針に学術上・実践上寄与するところが少なくない。よって本論文は、博士（工学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成15年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。